

ロボットセラピー普及へ

大会学術学療法業作道

浜田氏がシエアシステムを提案

第52回北海道作業療法学会学術大会（大会長・阿部正之社会医療法人北斗リハビリテーション部部長が、帯広市のかちプラザとオンラインによるハイブリッド形式で開催された。日本ロボット・セラピー推進協会の浜田利満理事長が、「ロボット・セラピーとリハビリテーション」で題して講演。シナリオ型のロボットレクリエーションの普及やロボット産業の発展にむけ、ロボットシエアリングシステムを提案した。

浜田理事長は、1990年代後半から2000年代前半に実用化されたさまざまなロボットを紹介し、初期のロボットセラピーは動物をペットロボットに代替することから始まり、その後、無線LAN遠隔操作ロボットの登場によって、セラピストが望むレクが実現しつつあるとし、被験者、ロボット、セラピストの3者関係が大切になったと説明。ロボットの発話機能が充実したことで、それを応用したコミュニケーションの場の創成、セラピスト・スタッフの

業務支援が期待できると解説した。厚生労働省の介護ロボットを活用した介護技術開発支援モデル事業による、シナリオ型ロボットの開発事業を紹介。ロボットとの触れ合いから始まり、繋ぎとしてロボットと歌や体操を実施、メインレクとして玉入れゲームなどを何度か切り替えて行い、ラジオリ体操で終了とするシナリオを介護施設で検証したという。

結果、利用者のコミュニケーション頻度がアップしたほか、ARRS感情分析では肯定的感情が増加。こうした検証結果を踏まえ、シナリオ型レクの実現に向け、導入からプログラミング、メインプログラムのエビロークと各フェーズ15分程度の所要時間によるシナリオや、

産業ロボットは、作る側と使う人が同じ技術屋ということもあり、互いに理解できる部分が多い。一方、介護ロボットは作る人が介護現場を理解していることは稀であると課題を提起。ロボットセラピーの実現には、作る技術と使う技術の融合が不可欠と訴えた。

また、介護ロボット普及の妨げになっている要因として、介護ロボットの導入費用や専門スタッフや安全確保のための介在者の配置を挙げ、その解決策としてロボットシエアリングシステムを提

共有し、センター配属のロボットセラピー実施プランチが介護施設等を巡回する形で、施設ごとに導入するよりもコストを7割削減できるとした。将来、同センターが実現し、さらに健常高齢者でも介護ロボットの利用が増えた場合を想定すると、ロボットのニーズは55万台を超え、市場規模は年間2兆円以上となり、現在の産業ロボット6千億円を大きく上回ると説明。シエアリングシステムの導入は、ロボットレクの普及だけでなく、ロボット産業の成長・活性化にも役立つと、効果を強調した。

一方、この講演を受けて阿部大会長は、作業療法士が臨床の場で積極的に介護ロボットを使い、現場視点で活用方法を考えていくことが必要と訴えた。



シナリオ型ロボットレクの効果を紹介する浜田氏

加。こうした検証結果を踏まえ、シナリオ型レクの実現に向け、導入からプログラミング、メインプログラムのエビロークと各フェーズ15分程度の所要時間によるシナリオや、